

幻の郷土玩具 ふく笛復刻

市立美術館開館30周年記念



郷土玩具・ふく笛(個人蔵)

下関名産のフグにちなんだ郷土玩具「ふく笛」が、下関市立美術館の開館30周年記念展に合わせて復刻された。実業家で、多くの美術品を下関市に寄贈した故・河村幸次郎氏(1901〜94)が約80年前に創案。遺族や陶芸家らの「復刻プロジェクト」によって、よみがえった。河村氏は、下関で三大呉服商に数えられた「伊勢安」を経営する一方、地域の文化を育て、外へ発信することに力を注いだ。1935(昭和10)年に民芸研究家らと「下関郷玩同好会」を結成。十数種類の郷土玩具を発表し、市内の主な神社に奉納した。



ふく笛を創案した故
・河村幸次郎氏一
株式会社グラナダ提供

80年前創案 河村氏遺族ら尽力

中でも「ふく笛」は会誌のタイトルにするほど代表的なものだった。大きな丸い目に小さな口、尾びれの穴から息を吹き込むと「ホーホー」と音が鳴った。しかし、河村氏が東京へ拠点を移し、戦争でいったん途絶えたことなどから、「幻の郷土玩具」と言われるようになり、復刻を望む声が上がっていた。

復刻は、東京在住の河村氏の長女美代子さんが発案。沖縄県石垣市の陶芸家・金子晴彦さんがプロジェクトを統括し、現存するふく笛を早稲田大創造理工学部教授の渡辺仁史教授が3次元スキャナーで解析した。仕上げの絵付けは福岡県福津市の津屋崎人形師・原田誠さんが指導した。

記念展「河村幸次郎と美の世界」初日の14日、来館者先着200人に無料で配る。初日から19日まで観覧無料。記念展は12月23日まで。問い合わせは美術館(083・245・4131)へ。(貞松慎一郎)